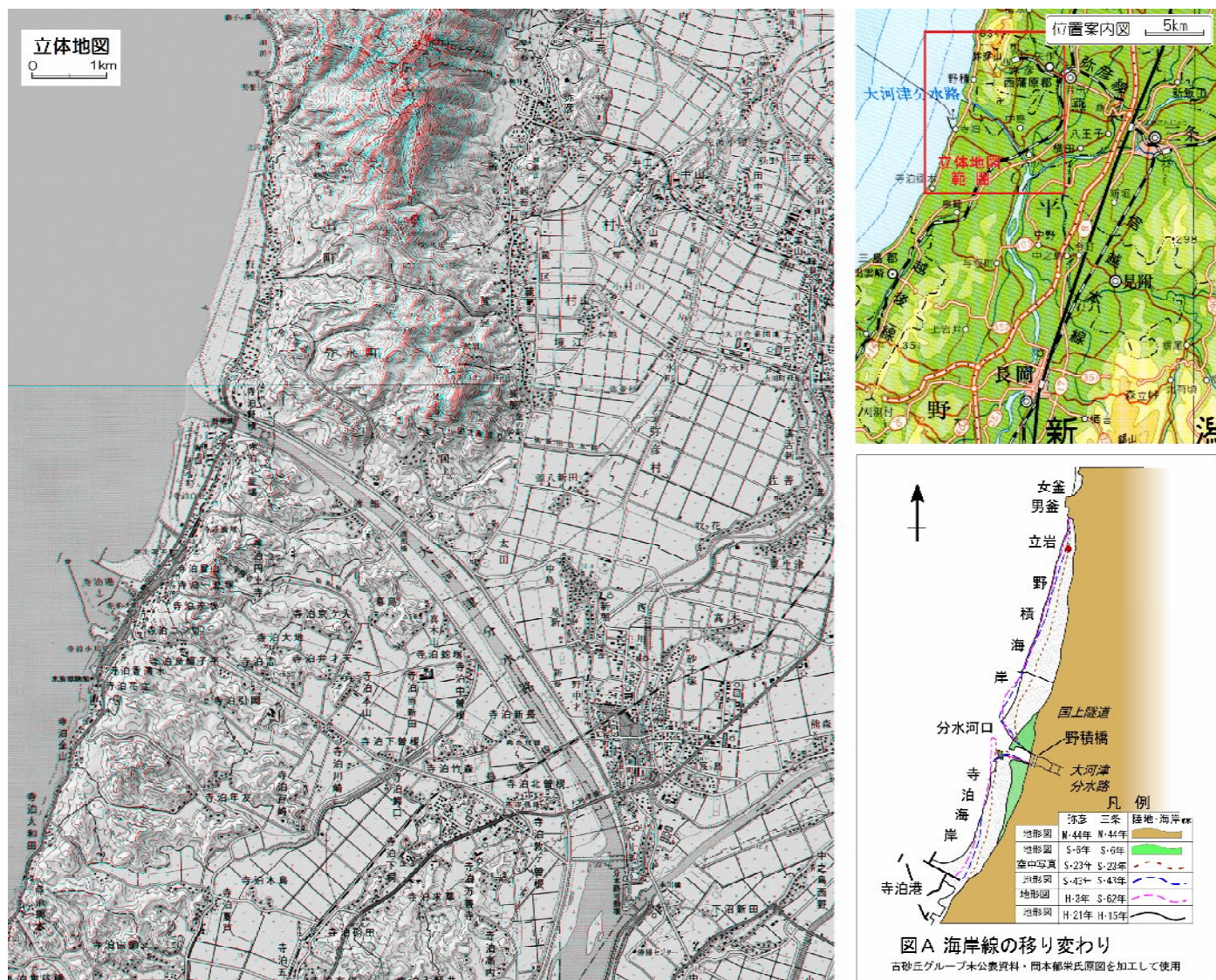


1. 大河津分水路とその河口に広がる砂浜の変遷

(長岡市寺泊野積～燕市地藏堂付近)



かつて、信濃川などの氾濫により越後平野はたびたび洪水に悩まされてきました。この被害をなくすため、信濃川の水の一部を海に流すように計画された水路が大河津分水路です。

分水路の掘削にはさまざまな経緯がありましたが、1922（大正 11）年にはじめて全長 9.1km の分水路に通水されました。

川幅は分流点付近で約 720m ですが、日本海に近いほど狭くなり河口付近で約 180m です。これは、河口に近い約 2km 区間が国上山の山地で、掘り取る土砂量を減らすため川幅を狭め、そのかわり河床を急勾配にして流れを速めることで、大量の水を海に流せるように設計されたためです。

分水路の放水により土砂が海に供給されますが、

とくに洪水時などには大量の土砂が河口付近にたまりまます。河口付近にたまった土砂は、波浪が強いつき（冬季など）に流され移動し、海岸に流れ着いた砂が砂浜をつくりまます。このようなことから、昔は砂浜がほとんどなかった寺泊海岸や野積海岸に、現在は広い砂浜が広がっています。

図Aは分水路が完成してから、両海岸の砂浜がどのように成長や変化をしたかを示したものです。通水以後、両海岸とも河口付近から砂浜が沖合に広がり、かつては海の中にあった立岩（図Aの赤丸）も 1968（昭和 43）年頃には砂浜の中に立つようになりました。しかし、最近では、河口に近い両海岸の砂浜が平成の初め頃のそれにくらべ縮小の傾向がみられます。